

豊岡市におけるハッチョウトンボの分布

高橋 匡

ハッチョウトンボ *Nannophya pygmaea Rambur* は腹長10~14mm、後翅13~15mmの邦産不均翅類中最小のトンボで、アジア南部に広く分布し、我国では本州、四国、九州に点々と分布している。北隆館の「昆虫大図鑑Ⅲ」の記載によれば、「滲出水のある浅い水たまり、水ゴケ湿原に定着し、平地では5、6月、山地では7、8月にみられる。」とされている。本種は飛翔力がよく、ほとんど産地の湿原から離れることなく、ごく限られた範囲で活動し、しかも環境の変化に対する適応力に乏しいため、極めて絶滅しやすい。我国でも各地で本種の絶滅が報じられており、地域によっては本種を天然記念物として保護している例もある。

但馬地方における分布については、但東町、出石町、豊岡市の森尾、奥野、戸牧などの産地が知られていたが、いずれも絶滅して現在では見られないと聞いていた。本校の標本としては、1973.VI.30 豊岡市・森尾で採集された2♂♂、2♀♀（採集者・柴田、谷角、遠藤）があるだけである。

1978年8月、出石町・荒木のミズゴケの生育する湿地で1♂を発見して写真に撮ったが、その翌年からはミズゴケ採集者に湿原が荒らされ、全く見られなくなった。

1982年1月、「但馬むしの会」の総会で、木下賢司氏から「ミズバショウとミズゴケの生育する大屋町・加保坂の湿原で多数のハッチョウトンボを見た。」という情報を得た。そこで、本年度の会の活動計画のひとつとして「但馬地方におけるハッチョウトンボ・ムカシトンボの分布調査」を提案した。

5月の末になって木下氏より「豊岡市・野上の休耕田でかなり多数のハッチョウトンボを見た。」との連絡を受け、6月6日（日）の午後、現地に行って3♂♂と2♀♀を確認した。それまで本種の生息地はミズゴケやモウセンゴケの生育する湿原と思いこんでいたので、この休耕田での発生確認によって考えがかなり大きく変えなければならぬことになった。そこで、当面は休耕田に的を絞って市内の発生地を調べることにした。その結果、発生を確認された地域は表に示した18地域である。表の中で*印を付した地域は休耕田ではないが、他はすべて休耕田である。1地域でも数枚の休耕田に発生のみられるところが多いので、実際の発生地点は18よりかなり多いことになる。

豊岡市内におけるハナショウブ発生確認地区(昭和57年)

No.	月日	発生地区	No.	月日	発生地区
1	6.6	豊岡市・野上	10	7.21	豊岡市・伊賀谷
2*	6.19	〃・市場	11	7.22	〃・上佐野
3	7.4	〃・奥野	12	7.23	〃・宮井
4	7.4	〃・立石	13	7.23	〃・福成寺
5*	7.4	〃・九日市	14	7.25	〃・祥雲寺
6	7.17	〃・栄町	15	7.25	〃・カジャ橋
7	7.18	〃・岩井	16	7.25	〃・森尾
8	7.18	〃・福田	17	7.26	〃・法花寺
9	7.18	〃・戸牧	18	7.27	〃・江野

調査はしたが、発生のみうれなかつた地区も少なくない。そのおもなものを挙げると、(1)耕地整理によって休耕地が新田状態に近いものとして、辻、目坂、金剛寺など、(2)休耕地はあるが乾燥していて発生に適さないと考えられるものとして、野垣、内町など、(3)湧水はあるが、平地で水温が高いと考えられるものとして、柳江、(4)発生しそうな環境の休耕地があるのに発生のみうれないものとして、下鶴井、畑上、三原などである。

今回の調査は極めて粗雑なものであつて、今後さらにきめ細かい調査を継続する必要がある。しかし、この調査から幾つかの点に気づいたので、今後の調査の覚と書きとして書きとめておきたい。

1. 休耕地といつても、そのすべてに発生のみうれるとは限らないことは言うまでもないが、それではどんな休耕地に発生のみうれたか。確かなことは言えないが、まず湧水があつて常時水の切れないことが必要のようである。しかもどうやら水温がある程度低いことが条件となるのではなからうか。柳江の休耕地のように水は充分にあつても水温の高い場合は発生しないように考えられる。これは今後もっと正確に調べる必要がある。総じて今回の調査で発生のみうれたのは、山際の谷間の奥の、いわゆる「山田」といわれるようなところが多かつた。

2. 上のことと関連するかも知れないが、生えている雑草があまり発生しすぎていたり、草丈が高すぎると思われる休耕地には発生のみうれない。草丈の低

豊岡市におけるハッチョウトンボの分布

い湿生の雑草が比較的によばうに生えている、日当りのよい休耕田に発生がみられたようである。

3. 調査地点における発生個体数については、今回はあまり正確に調べていないが、森尾のように多数みられたところと、少数しかみられなかったところとがある。また、合ばかりがみられて早がみつからなかったところもあり、逆に早が多く、合が比較的少なく感じられたところもある。これについては、合の腹部が赤くて目立ちやすいのに対して、早の体色が目立ちにくいことから、見落しを考えられるので、今後はもっと正確な個体数を調べる必要がある。

4. 本種の発生期間について、今回の調査ではあまりはつきりしたことは分らないが、木下氏の連絡から5月下旬には既に発生していることが分る。おおよその感じでは6月から7月にかけてが最盛期で、8月にはいと次第に減少し、8月中旬を過ぎると急に個体数が減少するようになると思われる。たとえば、8月12日、岩井、江野の発生地では1個体もみあたらなかったし、8月17日、7月には多数みられた森尾の発生地では3合をみただけであり、市場の湿原でも1合をみただけで、奥野の休耕田では全くみられなかった。

5. これはもっと調査をしてみないと何とも云えないが、今のところ、下鶴井、畑上、三原のように海岸に近い地区では、発生しそうな環境の休耕田があるのに発生がみられなかった、ということである。田結や小島が未調査なので結論的なことは云えないが、どうも海の影響が本種の発生を妨げているのではないか、と疑われる。もし、そうなら直接の原因は何か、その影響は海岸線からどれくらいの範囲まで及ぶか、今後調べてみたいことの1つである。

絶滅しかけている、と思っていたハッチョウトンボが、調べてみたら意外にたくさんみつかった、という嬉しさが今年の大きな収穫であったが、こうなってくると、但馬全域の分布も調べてみたいし、本種の生活史や生態についても調べてみたい。たとえば産卵の方法、孵化期間、幼虫の生態、羽化の方法なども知りたいし、特に知りたいのは、飛翔力のよい本種が、どんな方法で休耕田に分布を拡げていくのか、という問題である。

なお、余談であるが、本種の場合、少々の雨が降ってもその生息域から離れることがないので、傘をさしてでも調査ができるので、とかく天候に支配されやすい一般の昆虫にくらべて大変便利である。